

氏名(本籍)	<sup>あぶみ</sup> 鑑 <sup>や</sup> 屋 <sup>はじめ</sup> 一 (秋田県)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博乙第1,355号
学位授与年月日	平成10年2月28日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	歴史・人類学研究科
学位論文題目	章士釗研究
主査	筑波大学教授 安藤正士
副査	筑波大学教授 文学博士 片岡一忠
副査	筑波大学教授 文学博士 大濱徹也
副査	筑波大学教授 文学博士 平山和彦
副査	筑波大学教授 三石善吉

### 論文の内容の要旨

本論文は、中国の清朝末期から中華民国期をへて文化大革命中の1973年に劇的な死去をとげるまでおよそ70年間にわたって、ジャーナリスト、革命家、政治思想家、政治家、中国古典研究者として大きな役割を果たした章士釗(1881-1973年)の思想と行動に関する研究である。本論文は序章、第1部「章士釗の議会主義政治論」、第2部「新たな政治統合論の模索」、第3部「政治の中の知識人」および終章から構成されている。

序章は、研究の目的・時期区分・先行研究および次の3つの基本視角をのべている。第1に、20世紀前半の中国政治史における国家建設のための政治統合論として議会主義政治論が果たした役割を章士釗を通じて分析する。第2に、章士釗の議会主義論の基盤にある自由主義政治思想が伝統的な専制政治と革命独裁主義にたいしてどのような態度をとったかを分析する。第3に、1920年代に章は議会主義政治論の中国への導入に悲観的結論を表明するにいたるが、そのような政治的土壌の分析と新たな政治統合論の模索および第一次世界大戦後、1920年代の中国に生じた政治的環境変化の意味をさぐることである。

第1部「章士釗の議会主義政治論」(第1章から第6章まで)は、青年時代と1921年の渡欧までを扱い、おもに1911年の辛亥革命・中華民国建国初期の章士釗の議会主義政治論の展開とその挫折の過程を明らかにしている。章士釗が言論活動をはじめた1903年から革命運動の失敗と日本亡命をへて英国に留学した青年時代、辛亥革命直後に英国から帰国し、華々しく議会主義政治論を展開して影響力を発揮した『民立報』および袁世凱打倒運動のイデオログとして活躍した『甲寅』雑誌時代の政治論、南北和平会議のオーガナイザーとして活躍した章士釗の思想と行動を考察する。

第2部「あらたな政治統合論の模索」(第7章から第10章まで)は、1921年の湖南行きから1928年の3度目の渡欧までを対象とする。思想的には、議会主義政治の中国への導入に否定的な考えを抱くようになり、それに代替する政治制度の確立を模索し、やがて伝統文化の擁護と農業を基幹産業とした政治・社会組織による政治統合を提唱した。新文化運動と新文学運動に対する反対、古文擁護論、儒教教育の重視、農業立国論などの章士釗の言動は急進的な青年・学生から批判されるようになった。こうした状況のなかで、章士釗は段祺瑞政府の閣僚となるが、「三・一八」事件で国共合作の革命勢力の集中攻撃を受けて失脚し、これ以後、章士釗は政治家としては第一線を退くこととなった経緯をのべる。

第3部「政治の中の知識人」（第11章から第14章まで）は、1930年の東北大学教授就任から抗日戦争期、国共内戦期、人民共和国建国以後の各時期の章士釗の行動を跡付ける。1932年の陳独秀裁判では、章士釗は1928年に成立した国民党の「訓政体制」の本質が国民党の一元独裁体制にあると批判、抗日戦争期には国民参政会、政治協商会議、国民大会に参加し、「訓政体制」から「憲政体制」に移行する憲法草案の制定にたずさわった。1949年の中華人民共和国の成立に際しては、国共和平会談に国民党側の代表として参加したが、中共の統一戦線の一翼を担った。中華人民共和国では政治協商会議、全国人民代表大会の代表となるが、議会主義政治論は禁句となり、もはやかれの政治的な活動の場はなかった。そればかりか、反右派闘争・文化大革命で批判を受けたが、毛沢東の庇護を受け、文革中に異例にも『柳文指要』を出版したこと、1973年に統一戦線活動の一環として、香港に専用機で赴いて92歳で逝去するまでをあつかう。

終章では、章士釗の思想と行動を通じて、議会主義政治論によって近代国家を建設しようとしたかれの主張が中国近現代史にもっている意義と限界を考察している。かれの政治思想の中核は19世紀の自由主義であり、制度的には名望家の議会主義、文化・思想の面で保守主義者であった。かれがモデルとする議会・内閣・憲法・政党・選挙など西欧近代国家の諸制度についての考察があったが、中国に近代国家を建設する上で重大な障害となっていた諸要因についての体系的で持続的な考察が十分でなかった点、また章士釗が規範としたものが19世紀末の英国の政治思想であったため、第1次世界大戦後の革命と大衆の政治参加を求める強烈なナショナリズムの台頭に背を向けることになった。そして中国の国家建設はかれの反対するカリスマ的指導者を有する革命政党による軍事的・一元独裁体制の樹立という道にとって代えられた。しかし今後、章士釗の主張した議会主義政治論は、中国における経済発展のための政治的環境要因として、再び議論されるであろうとその意義をのべる。

## 審査の結果の要旨

本論文は、これまで中国近現代史研究のなかで言及されることの少なかった章士釗の思想と行動を精力的に資料を渉猟した基礎の上に、実証的・体系的に解明することをめざした最初の本格的な研究として高く評価できる。かれの唱える議会主義政治論、調和論、農業立国論、伝統文化保守主義は、中国近現代史の各時期を代表する主張であり、それ自身の解明に大きな評価を与えることができるが、本論文はこれらを中国近現代政治史のなかに関連させて考察した点、また、70年間にわたるかれの思想と行動を中国近現代史のなか位置づけることにより、本論文がこれまでの研究がふれることの少なかった中国近現代史の未開拓な部分を開拓することに成功した作品として高く評価できる。特筆すべき成果は以下の通りである。

第一に、本論文は、章士釗の議会主義政治論が名望家を担い手とする自由主義政治思想であること。しかも、その思想が具体的に当時のイギリスとフランスのどのような思想家の影響を強く受けたものであるかを実証して、中国における議会主義政治論の受容と議会制度が中国で実際に行われた場合の諸問題を明らかにした。

第二に、本論文は、章士釗が第一次世界大戦後の世界と中国の大きな変化に対し、伝統的な農業立国論に基づき、政治的にも、思想・文化的にも保守的な態度をとったことにより、中国の国家建設がかれの反対するカリスマ的指導者に率いられた大衆参加の革命政党による軍事的・一元独裁体制の樹立という道にとって代えられ、章士釗も思想家・政治指導者としても第一線を退かざるをえなかったことを明解に分析していることである。

第三に、本論文は、章士釗の思想と行動に関する考察を通じて、中国がアジアの諸国のなかで、辛亥革命以来、議会主義政治論の豊かな経験をもち、また、革命と伝統をめぐる諸政治勢力間の激しい対立と戦争、政治指導者の激しい交代があったにもかかわらず、中国大陸では現在に至るも政治的・文化的凝集性と政治的・文化的専制主義の伝統が保持されていることを明らかにした。

第四に、本論文は、毛沢東と章士釗の関係の叙述を通じて、これまで何うことのできなかった現代中国の知識人の置かれている文化専制主義の一側面を明らかにした。

第五に、本論文は、国家建設における軍事力のコントロールの問題、中国における連邦制の問題、中国社会における公権力の建設の問題など近代国家建設において解決すべき重要問題を提起していることである。

しかし、本論文には、章士釗の古典研究がもつ意味、とくに中国の文人政治との関係で政治における保守主義が中国革命において占める位置を明らかにし得なかったこと、また、毛沢東との関係を十分に解き得なかった弱点がある。これらの課題を残しているとはいえ、本論文は、章士釗の思想と行動に関する研究を通じて、辛亥革命以来の中国近現代史における議会主義政治の思想と歴史に関して新しい知見を加えた博士論文として十分な独創性があり、学界に対し大きな貢献をなすものと認められる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。